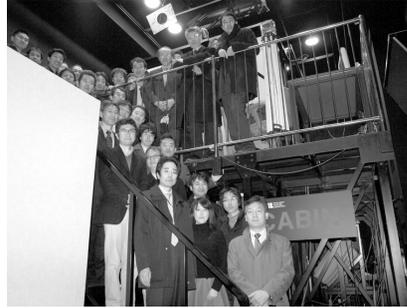


■トピックス1

VR文化フォーラム 「さよなら CABIN」

大谷智子 (東京大学)



1997年、5面大型スクリーンに映像が映し出されるCABIN (Computer Augmented Booth for Image Navigation)が、東京大学インテリジェント・モデリング・ラボラトリー (Intelligent Modeling Laboratory ; IML, 東京都文京区弥生) に設置された。あれから15年、多くの研究者とともに歩んできたCABINが、その歴史に幕を閉じることとなった。この15年間の歴史を振り返るとともに、メディア技術研究の未来について考えるシンポジウムが、2012年12月18日(火)、東京大学農学部キャンパス向ヶ岡ファカルティハウス (東京都文京区弥生) において開催された。シンポジウムは、3つの部によって構成され、順に、廣瀬通孝氏 (東京大学) による基調講演、パネルディスカッション、トークセッションであった。シンポジウムの最後に、IML 6階のCABIN前へと移動し、記念撮影、および最後のデモが行われた。フォーラム全体司会は相澤清晴氏 (東京大学)、パネルディスカッション司会は廣瀬通孝氏、谷川智洋氏 (東京大学)、トークセッション司会は広田光一氏 (東京大学) が行った。なお、今回の文化フォーラムは、USTREAMによって中継された。現在もアーカイブにより視聴可能である (<http://www.ustream.tv/channel/goodbye-cabin>)。



CABIN 最後のデモの様子

師走の多忙期であるにもかかわらず、学术界だけではなく、企業やミュージアムからの参加者も多く、会場からあふれ廊下から聴講するほどの大盛況ぶりであった。さらに、USTREAM中継を通じた国内外の参加者も多く (合計視聴数401, 2013年1月25日時点)、CABINとの別れに対する様々な思いが窺われる。



廣瀬氏による基調講演

廣瀬氏による基調講演のテーマは「CABIN 誕生秘話」であった。1989年のバーチャルリアリティという言葉の誕生から1990年3月 Santa Barbara

会議、1992年イリノイ大学のCAVE誕生という時代の流れだけでは語り尽くせない。1995年初夏、本郷通り沿いの或る蕎麦屋での会話をきっかけに、その後の技術設計、コンテンツ設計、そして配置場所の設計など多岐にわたる試行錯誤を経て、1997年の完成に至ったという貴重な裏話は、観客を大変魅了した。

廣瀬氏の基調講演を受け、館璋氏 (慶應義塾大学) と佐藤隆夫氏 (東京大学) によるパネルディスカッション



パネルディスカッション (左より 佐藤氏、館氏、廣瀬氏)

「CABIN との歩みをふりかえって」が行われた。館氏は、当時の CABIN における音環境の再現に関する研究を振り返り、テレプレゼンス研究の立場から、視覚、触覚、聴覚の基盤技術成熟後の研究について言及した。佐藤氏（東京大学）は、人間の視覚における物理世界と知覚世界の闘ぎ合いが生じる例を紹介し、CABIN の特性を活かした天井面と床面に視覚刺激を投影したvectionの異方性に関する研究を紹介した。

続いて、当時の若手研究者で、実際に CABIN を用いた実験をしていた先生や、CABIN の傍らで実験をしていた先生らによるパネルディスカッション「IML 型情報メディア研究の今後」が行われた。まず、登壇者である稲見昌彦氏（慶應義塾大学）、苗村健氏（東京大学）、北崎充晃氏（豊橋技術科学大学）、矢野博明氏（筑波大学）、野嶋琢也氏（電気通信大学）が、当時の CABIN との関わりや、IML 型の情報メディア研究の未来について熱い議論が交わされた。登壇者らによれば、IML は、共同スペースでの他研究室との交流や、CABIN 関係者用の情報共有 web キャビクラ[通称]を通じた世代間の交流など、普段から異分野の研究を知る機会が多い場であったという。この環境を活用し、CABIN の前で、それぞれのデモを見せ合い、研究成果を自慢しあった経験が今に活かされているというお話は、ディスカッション中

に何度もあがった。CABIN のように、多くの研究者が使ってみたいとおもう何かがあることが重要であると感じた。また、数多くの研究成果や世界で活躍する研究者を輩出していった IML は 2012 年 3 月に閉所し、CABIN は今回解体されることになった。今後も、異分野の研究者らと議論し合う場、制約にしばられない自由な形態や仕組みが、情報メディア研究には必要なかもしれないと思った。

在任時に、CABIN をバックアップする役割を担っていた小野謙二氏（理化学研究所）、小木哲朗氏（慶應義塾大学）、茅原拓朗氏（宮城大学）、中島義和氏（東京大学）、山田俊郎氏（岐阜県情報技術研究所）、渡邊浩志氏（東京大学）、立山義祐氏（慶應義塾大学）、阿部浩二氏（首都大学東京）によるトークセッションのテーマは、「今だから話せる〇〇」であった。CABIN の床面硝子制作時の話、CABIN 以外の大規模機械も同時に管理していた時のアクシデント、CABIN 研究隆盛期後の変化、東日本大震災後のメンテナンス話、そして本日のデモの準備話など、知られざる管理運営側のお話であり、会場からは笑いや溜息、驚嘆の声など多くの反応があった。この後、IML へと移動し、CABIN と共に記念写真の撮影を行い、最後のデモが行われた。どの場においても、CABIN にまつわる話は尽きず、盛況な内に会を終えた。



上：パネルディスカッション「IML 型情報メディア研究の今後」、下：トークセッション「今だから話せる〇〇」